

第 1 回教育・人づくり部会における主な意見等について

○…第 1 回部会意見 ●…他部会の委員・専門部会に属さない委員からの意見

目指す姿 1 秋田の将来を支える高い志にあふれる人材の育成

- 子ども達の学ぶ意欲を高めるためには目標があった方がよい。キャリア教育を進めていく中で、将来自分がどういうことをやりたいのかといった意識が形成されていく。こうした事業がしっかりと実施されることが学力向上にもつながるのではないか。(廣田委員)
- 労働人口が減少する中、特別支援学校生の就労に対する期待は大きいと思われるが、そのためには特別な支援が必要であり、そこに予算を付けて事業を行うことは大変良いことである。(廣田委員)
- 学んだ事が地域においていかに役立つかを体感できるよう、デジタル探究コースを設置している高校において、地域課題型実践学習を試験的に導入してはどうか。(豊田部会長)
- デジタル探究コース設置校で実施された取組の情報発信が足りないのではないか。(廣田委員)
- デジタル教育がいかに地域に役立つかを可視化するため、高校生デジタル地域貢献コンテストのようなイベントを企画し、年 1 回開催してはどうか。(豊田部会長)
- (高校生デジタル地域貢献コンテストについて) イベント開催に当たっては、英語部門を設け、YouTube 等で積極的に発信していくことが大事である。(佐藤委員)
- 高校生に対する起業家教育を実施すべきではないか。(佐藤委員)
- キャリア教育に男女共同参画(女性活躍)の視点を絡めていくべきではないか。(佐藤委員)
- ひきこもり等で、能力はあるが集団生活になじめない方に対し、メタバースによる学びや活動の場を保障することにより、そうした方々の才能を活かす就労支援を行うことも可能ではないか。(佐藤委員)
- 高校におけるキャリア教育を通して、自分のライフプランを立てるとともに、自分はこういった仕事をしたいのか、こういった仕事が合っているのか、ということの日々考え、自分と向き合う時間を設けることが大事である。(未来創造・地域社会部会：石田委員)
- 町民のライフヒストリーを高校生にインタビューさせるプログラムを実施した。様々な経験をしながら地元で活躍している大人がいることを知ることは、県内定着に効果的な取組であるので、中学・高校に導入していただきたい。(未来創造・地域社会部会：石田委員)

目指す姿2 確かな学力の育成

- 高校数学について、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド方式により、全県又はブロック単位で、習熟度別授業を行ってはどうか。(豊田部会長)
- 高校生が競争心を持って楽しく数学を学べるよう、オンラインを活用した数学コンテストのようなイベントを企画してはどうか。(豊田部会長)
- 教師の性として、50分間教えないと教えた感がないという気持ちがあると思われるが、それは子ども達にとって必ずしもよいことではない。(佐藤委員)
- 子どもは、自ら問題に向き合うことで、初めて教師に支援して欲しいものが見つかる。秋田の探究型授業は高い評価を受けているが、まだまだ教師の指導で終わっている部分がある。教師が支援の側に回るよう、授業改善を図る必要がある。(佐藤委員)
- VUCA時代となり、この先どうなるか分からないとすれば、色々なところに今のうちから投資をしておく必要があるのではないか。(廣田委員)
- オンラインで様々なことが可能となり、教育の在り方が変わる中で、学校の統廃合を行う必要があるのか。必ずしも対面で行う必要のない授業のために、長時間通学をさせる必要があるのか。(豊田部会長)
- 数学の授業においては、他者との交流から問題の解き方や数の見方を知ることが重要であり、対面授業も必要であると思う。(佐藤委員)
- 対面での教師の指導や同じ教室にいる他の生徒との対面での交流も大事であるが、1人1台端末を活用して他の生徒の解き方や考えを瞬時に共有するなど、オンライン化することで実現する新たな形の刺激もある。(豊田部会長)
- 授業におけるICT活用について、まだまだ教師が使うということで終わっている。子ども達がどう使うのかという視点での議論が必要である。(佐藤委員)
- 全国学力・学習状況調査や県の学習状況調査を踏まえ、どういった授業をしていくのか、授業のどこを変えなければならないのか、議論する必要がある。(佐藤委員)
- デバイスはアウトプットの共有に対しては有用であるが、インプットする道具として使う場合、2台必要である。デバイスを2台持たせるという政策をとらない限り、電子教科書の活用については抑制的であるべきである。(豊田部会長)
- 科目の特性に応じたデバイスの効果的な活用方法を検討する必要がある。(豊田部会長)
- 「デジタル人材」について、人によって捉え方が異なる。どのような能力を持つ人材なのか、きちんとすりあわせた上で、各学校段階で必要とされる資質・能力を育成する必要がある。(廣田委員)
- 外部人材が授業のサポートを行う場合に、学校のネットワークに接続できるよう、指針を定めていただきたい。(廣田委員)
- 学生・生徒が楽しい授業を行うためには、先生自身が楽しいと思える授業でなければならない。先生方が本来業務に専念できるよう、教員業務支援員配置の充実を図る必要がある。(廣田委員)
- モデル校を指定し、教師が教科指導のみに専念できるような実証実験を行い、秋田から働き方改革の好事例を発信してはどうか。(佐藤委員)
- これからは、全ての子ども達にデジタルに関するスキルを身に付けてもらう必要があるが、将来的にICTをビジネスにするような高度なデジタル人材の育成とは別の

話である。(豊田部会長)

- オルタナティブ教育は、これまで公立高校で行うことは不可能と思われていたが、広島県（イエナプラン教育校）や山形県天童市（マイプラン学習）では新しい試みが行われており、今後、主流になるかもしれない。今すぐ取り入れなくとも、視察を行う必要があるのではないか。(廣田委員)
- チャットGPT対応の教育の在り方について、全国に先駆けて指針を示すよう、検討していただきたい。(豊田部会長)

目指す姿3 グローバル社会で活躍できる人材の育成

- 県内の児童生徒が、オンラインで県外や国内外の児童生徒と触れ合うことは、より広い視野をもって秋田の価値を再発見することで、秋田で学ぶ価値を知り、グローバルなマーケットの中で秋田をどう発展させていくかを考えるきっかけになるので、取組を更に広げていただきたい。(豊田部会長)
- グローバル社会で活躍できる人材を育成するとしたときに、英語教育だけでよいのか。AIによる文字起こしや翻訳技術が発展しており、これらをうまく活用する方法も考えるべきではないか。(廣田委員)
- 翻訳技術が急速に発展しており、10年後、20年後に英語力が本当に必要なのかは分からないが、さしあたり10年程度は英語力が必要な時代が続くと思われるので、英語教育には力を入れていく必要がある。(豊田部会長)
- 英語には、ツールとしての英語と、グローバルな視点を開くための英語という観点がある。スピーチコンテストなどで、秋田について英語で語ることを実践する場を設けてほしい。(豊田部会長)

目指す姿4 豊かな心と健やかな体の育成

- オリンピック選手を育成することと、学校で部活動をしながらか人間の成長を促すことは異なる。部活動指導員に対し、学校での部活動の在り方についてレクチャーする機会を設ける必要があるのではないか。(廣田委員)
- 学校教育の役割は教科教育であり、先生が部活動指導を行うことは世界的に見ても極めて特殊であることを認識し、部活動に人間形成を任せていた日本の教育のあり方を見直す必要があるのではないか。(豊田部会長)
- 体育祭など、みんなで体を動かし合って何かをすることは、若い人にとって重要である。コロナが収まった今こそ、体育の授業が重要になってくる。(豊田部会長)
- 運動部活動サポート事業において、高校野球強化支援が単独であることに違和感を覚える。様々なスポーツがある中で、本県の気候や土地を考えて、県民が誇れる他県にはないスポーツを増やしていくことも大事ではないか。(佐藤委員)
- それぞれの部活が頑張っている中で、野球だけ全校応援するのはやめるべきではないか。やるのであれば、公平であるべきである。(佐藤委員)
- 部活動の地域移行について、元プロ選手が地域の中にいるが、資格の問題があって指導できないという話を聞いたことがある。資格取得のサポートができれば、指導者の幅も広がり、子ども達の技術向上にもつながると思うので、取組を強化し、人材の

掘り起こしをしていただきたい。(観光・交流部会：佐々木委員)

目指す姿5 地域社会の活性化と産業振興に資する高等教育機関の機能の強化

- 社会人のリスキリングのために、大学等でオンラインによる講座を開設し、県内どこからでも受講できるような体制を整備するよう、県から県内大学等に働きかけてはどうか。(豊田部会長)
- 秋田大学では、従前から、リカレント・リスキリングの機会を提供しているが、受講者や雇用主に負担感があり、利用が進んでいない。ICTを活用して自由にキャリアアップできる仕組みを作るべきである。(佐藤委員)

目指す姿6 生涯にわたり学び続けられる環境の構築

- 文化芸術施設の入場料が廉価すぎると感じている。サグラダ・ファミリア等と日本の文化芸術施設を比較すると、価格差が5～10倍くらいある。入場料を上げ、展示物の価値やサービスの向上を行うことが必要である。秋田の文化芸術分野はもっと自信を持って発信し、しっかり稼ぐことが必要である。(観光・交流部会：丑田委員)